

当科における深頸部膿瘍症例の検討

川上 美由紀 脇坂 浩之 鷗久森 徹 暁 清文

愛媛大学耳鼻咽喉科

【はじめに】深頸部膿瘍は抗菌剤が普及した今日では減少傾向にあるが、高齢者や基礎疾患を有する症例では縦隔への膿瘍の進展例など重篤化例をしばしば経験する。感染早期の判断の遅れが致命的な結果につながることも多いことから、迅速な診断と適切な初期対応が求められる。そこで、今回われわれは当科で過去4年間に経験した深頸部膿瘍症例について臨床検討を行った。

【目的】対象は2004年6月から2008年6月までに愛媛大学耳鼻咽喉科で入院加療を要した深頸部膿瘍9症例である。男性4例、女性5例で平均年齢は71.2歳であった。

【結果】全例とも他院からの紹介症例で、深頸部膿瘍の診断は前医ですでに受けていた。5例は救急車による搬送を行った。全症例に当科初診日に外科的ドレナージを行い、うち5例は同時に気管切開術を行った。基礎疾患として糖尿病を有する症例が5例あり、経過中に消化管出血、消化管イレウス、心不全を合併した症例が1例ずつあった。

【考察】深頸部膿瘍は今日においても死に至る可能性のある疾患であり、気道閉塞や縦隔炎への進展を回避するためにも、迅速な診断と外科的ドレナージの時期を逃がさないことが重要である。本検討では全症例が他院からの搬送患者であり、搬送元では耳鼻咽喉科以外の科で加療を受けていた。以上のことから、耳鼻咽喉科以外への本疾患治療に関する啓蒙が必要と考えられた。